

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370649

研究課題名(和文)リメディアル教育を必要とする学習者を自律的学習者にするための教授法・教材開発

研究課題名(英文) A developmental study on teaching methods and for the learners who need remedial English Education

研究代表者

酒井 志延 (SAKAI, Shien)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：30289780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：リメディアル教育では、中高の復習はほぼ効果をあげないことを解明した。できない学生が発生する原因は、自己肯定感が低くなったことが原因で、そのような学習者は、努力すれば、成長するという努力帰属意識から、能力が無いから自分はダメであるという負の能力帰属意識を持つ。この負の意識を変える方法では、教員と教材の要因がある。前者としては、マズローの所属の欲求を協同学習で満たすことが重要である。後者では、学習を通して成長しようという意識が薄い学生を前向きにするためには、学習が「おもしろい」と思わせることが不可欠。おもしろいと思わないと、知識を意欲的に内在化しようとしにくい。おもしろいと感じさせる教材を作成した。

研究成果の概要(英文)：In English developmental education, relearning the contents of middle and high schools was clarified that it does not raise substantial effect. The reason why an individual student becomes an unprepared student is that his self-esteem becomes low. He feels that he is hardly cable because he does not have enough ability to study English. In order to raise his self-esteem, there are two factors. One factor is a teacher. To be motivated implies that one desires to be in the classroom and to study with a teacher and classmates. When one's intention to learn is set, learning starts. Unless his or her mind to learn is set, learning cannot progress. as it is human nature to seek company of those who like us. Therefore, if a teacher likes a student, he can have a will to study with the teacher. Materials for students with low willingness to grow up through learning should be fun. Unless the material is fun, they will not study. Therefore, this project has created a textbook named Fun Time.

研究分野：外国語教育

キーワード：リメディアル 英語教育 能力帰属意識 努力帰属意識 所属の欲求 自己効力感

## 1. 研究開始当初の背景

英語ができない学生が増えている。大学の教科書として英検3A級レベルのものが幅を利かせている現状もある。ではなぜそのような学生が生まれるのか。小学校以来の普通教育が完成して高等教育に移って行くというプロセスを教育課程上の接続というが、その接続が適切に行われるためには、米国のACT、SATや欧州のバカロレアやアビツアーのような高校卒業生の学業達成度を共通に評価する尺度が必要である。しかし、日本には卒業時の学業達成度を測る基準を作ってこなかった。そのため、同学齢で難易度の高い教科書で学ぶ高校生と低い教科書で学ぶ高校生が存在し卒業していく現状が生まれた。かたや18歳人口が減少している現状で、定員を確保したい大学は、目をつぶって低学力の高校生を合格させている現状がある。そこにせいぜい小学生程度の学力しかない大学生が生み出される構図がある。しかし、学業達成度を測る高大接続テストが実施される可能性は当面無い。したがって、大学教員が、リメディアル学生を努力して指導するしかない。研究途中で、文科省から、興味深い調査報告が発表された。文科省は2014年度に国公立高校3年生の約7万人(話す力は、約16900人)を対象にした英語力の調査結果で、実用英語検定の5級(中学1年生)から3級(中学3年生)までのレベルに相当する高校3年生の割合は「読む」が72.7%、「聞く」が75.9%、「書く」が86.5%、「話す」が87.2%であったと報告した。また、意識調査で、英語の学習が好きか聞いたところ「そう思わない」と答えた割合が58.4%。A1(英検の5級から3級に相当)ではほぼ7割だった。また、どの程度まで英語力を身につけたいかとの問には、「国際社会で活躍」が8.8%にとどまった。そして「学校の授業以外での利用

を考えていない」と答えたのは25.1%だった。この結果の「高3の約8割が中学3年生程度かそれ以下の英語力であるということは、同学齢の8割近い学習者が、英語教育で落ちこぼれている現状を表しているといえる。

この結果は、本研究が問題と直視してき現状を裏付けるものであった。同報告によると、高卒程度といわれる英検2級レベルは、読むが2.0%、聞くが2.0%、書くが0.7%、話すは1.7%であった。そう考えると、大学進学率は5割を超えたあたりなので、当然、日本の大学の英語教育は、リメディアル教育が主流になることは明らかである。

## 2. 研究の目的

リメディアル教育を必要とする学習者を自律的学習者にするための教授法・教材開発をする。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1)日本の英語教育で、多くの学習者は、学習による知識の内在化に、なぜ失敗するのか。(2)失敗した者の意識はどう変化するのか。(3)それを改善するためには、どのような指導法及び教材を開発する必要があるのかについて研究する。

## 4. 研究成果

授業で、学習者は、知識や技能を、他人から教えられるか、自分で獲得するかして、短期記憶に取り込む。次に、それを内在化する。脳学者の池谷裕二が『受験脳を作る』(2011)でいうように、「脳は覚えることよりも忘れることが得意」である。理解した知識を長期記憶にするためには、意識的に内在化させる必要がある。内在化は、反復練習や応用的な練習などによって行われる。

しかし、授業で情報が注入されても、その内在化は個人の努力に任されている。しかし、内在化のための反復学習は往々にし

て退屈と倦怠感をもたらす。それらはすぐ苦痛と感じられるようになる。また、応用的な練習や課題学習は、先が見えないことが多く、曖昧性が高い。現実的には、その曖昧性に耐えようとする学習者と、それを避ける学習者ができる。一生懸命考える、練習する、試行錯誤する学習者は自律的学習者になる。一方で、学習者の周りには誘惑が多いことも手伝い、学習や練習が要求する退屈さや曖昧性に負けて、学習や練習をあきらめてしまうことができる。教員や友人に「何をすればいいのか」をたずねる者もいる。このような学習者は、学習内容を内在化しにくい。学習内容の内在化の失敗は、テストの結果として表される。

同時に、現在の日本の教育は、個人間に序列の意識を植え付け、完璧を達成させようとする。教育研究者の刈谷剛彦は、『アメリカの大学・日本の大学』で「(入試制度)本番の試験は儀礼に過ぎず、それ以前に丹念に模擬試験が繰り返され、本番の誤差を極力ゼロに近づけるための調整が、進路指導というかたちで遂行されている。その過程で、生徒はいやというほど自分の『学力』を思い知らされるのである」と述べている。アカデミックな状況の中で、生徒たちは自分の序列を思い知らされている。だから、「お前は不十分だ。だから勉強しろ」と言っていて、「はい、そうですか。勉強します」という学習者は、なかなかいない。なぜかというところ、ある程度成長すると、多くの人間は、もっと成長を意識しなくても、自分の狭い世界で十分に生きていけることを知っているからである。英語が話せなくても、英語ができなくても、日本で何とか生きていけると思っているのであろう。そういう生徒に対し、教員は、一人一人をもっと伸ばしたいために、不十分さを認識させようとする。そのために試験を使う。それは減点方式の試験であることが多い。そのテス

トで、学習者に不十分さを理解させようとする。その結果を示し、個人に完璧さを目指させる。そして、完璧を達成できる個人を高く評価する。しかし、できる者は少数であるので、多くの学習者は、学校や試験を忌避するようになる。また、低評価しか受けられない学習者は往々にして、自己肯定感を低くする。その結果、苦手意識を学習者に生じさせる。学習に関する試験の低い結果は、学習者に、無力感を与える。

高校で英語教師の経験がある清田洋一は、英語が苦手な学習者を調査し、その結果として「中・下位層の学生は中1で英語学習を始めたときは意欲的であったが 難しい、良い成績が取れないなど、一度苦手意識を持つとその意識が大学まで続く傾向がある」と報告している。つまり、学習者は本来、努力すれば成績が上がるという「努力帰属意識」を持つことを期待されているのだが、自分の努力が高い成績が取れなくなることが続くと、高い成績の達成には能力が必要であるという「能力帰属意識」に変わる。

学習者の意識が一旦変わると、高校や大学に環境が変わっても、努力しようという気持ちを起こしにくい。したがって、苦手な課題を与えられた時に、「難しい」、「自分にはできない」と思ってしまうがちである。このように苦手意識を持った大学生は、「どうせ高い成績は取れそうもない」とあきらめそして苦手意識が来てしまい、指導を積極的に受け入れようとしなくなる。大学に入ってきた多くの学生を見て教員はリメディアル教育をしようとする。しかし、リメディアル教育は慎重に行わないと失敗する。なぜか、リメディアル学生を調査すると基本的な英文法と語彙が無いので、それをつけさせる授業をすればいいと考えてしまうからである。筆者も最初そう考えた。中学校の内容を指導する授業の成果で、情報が

短期記憶の中に入り，形式的操作ができるようになる学習者は存在する。しかし，時間が経つと，そのできるようになったはずの知識がまったく身に付いていないことがよくある。それは，能力帰属意識になった大学生は中学校の内容を意欲的に復習したいとは思わないからである。

したがって，リメディアル教育の根幹は，もう一度学習者の意識を，能力帰属意識から，努力帰属意識に戻すことである。この意識を変えない限り，本人の努力は望めない。能力帰属意識の学習者を努力帰属意識に戻するためには，どうすればいいのか。教員と教材の要因があると考えられる。教員の要因としては，学生が授業において，マズローの所属の欲求を満たすように指導することが重要である。つまり，協同学習において，学習者を「この先生とまたこのクラスメンバーと一緒に学んでみたい」という気持ちにさせることである。一人で学習するより，仲間で支え合うことで，曖昧性に対する耐性を克服しやすい。授業の形態としては，受動的な学習でうまくいかなかった学習者たちなので，アクティブ・ラーニングがふさわしい。教員の指導方法であるアクティブ・ラーニングと協同学習の方法については，多くの論文と研究会で発表した。

教材の要因としては，学習を通して成長しようという意識が薄い学生を前向きにさせるためには，その学習が「おもしろい」と思わせることが不可欠。おもしろいと思わないと，知識を意欲的に内在化しようとしな。学習に対して「おもしろい」という意識は，各個人で異なると思うが，ここ数年の『リメディアル教育研究』に掲載されている研究分担者の牧野眞貴(近畿大学)の実践が「おもしろい」，「わかりやすい」と思わせている良い例である。一般的には，おもしろい教材は，「わくわくする」+「成

長する」ものが多い。学習者によってその比率は変わる。リメディアルの学生は，前者の割合が高く，習熟度の高い学生は後者の割合が高い方が，学生をひきつける。この要因として，研究分担者の牧野眞貴がその教材『Fun Time』を作成した。

5．主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

酒井志延(2014)「グローバル化のための語学教育を担当する日本人大学教員の意識に関する研究」,『リメディアル教育研究』, 9(1),57-68.

SAKAI, S. (2014), “Toward Implementing the Principle of the Common European Framework of Reference for Languages within the Japanese Educational System.” *The CEFR in An East Asian Context*, 71 - 98, National Taiwan University Press.

酒井志延(2014)「グローバル化のための語学教育を担当する日本人大学教員の意識に関する研究」,『リメディアル教育研究』, 9(1),57-68.

酒井志延, 小林直人(2015)「アクティブ・ラーニングで学ばせる」,『千葉商大紀要』, 52,215-223.

酒井志延(2015)「英語リメディアル教育研究者から見た小学校英語教育」,『世界と日本の小学校の英語教育—早期外国語教育は必要か』172-200, 明石書店.

牧野眞貴, 平野順也(2015)「英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査」,『近畿大学教養・外国語教育センター紀要, 外国語編』, 6,39-55.

安達理恵, 酒井志延(2016)「中小企業が求めるグローバル人材育成教育に関する事例調査」,『言語教育教師』,3(1),121-132.

酒井志延(2016)「ヨーロッパ統合を支える協同学習」『国府台経済研究』, 26(1), 107-123. 酒井志延(2016)「文法訳読式を反転学習にするための研究」『言語教育教師』, 3(1), 160-170.

牧野眞貴(2016)「英語リメディアル授業におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察」『英語教育研究』, 39, 1-16.

牧野眞貴(2016)「英語リメディアル授業におけるアクティブ・ラーニングの取り組み---スピーキング活動を中心として」『言語教師教育』, 3(1), 147-159.

〔学会発表〕(計10件)

酒井志延(2013)「学習自律を育てる指導力」, 全国英語教育学会, 北海学園大学。

SAKAI, S. (2013), "Toward Setting Professional Standards for Teacher Development in Japan," International Conference FLERI. 韓国ソウル大学。

SAKAI, S. (2014), "Overview of Methodological Problems in Japan EFL Context," JACET workshop at European Centre of Modern Languages.

SAKAI, S. (2014) "Developing and Implementing J-POSTL," JALT Critical Conference for CEFR, 中部大学。

SAKAI, S. (2014) "A Study on Enhancing Students' Autonomy in Asian EFL Areas." Asia TEFL International Convention. Borneo Convention Centre.

ADACHI, R. SAKAI, S. (2015) "Which will be more necessary for Japanese university students, English proficiency or intercultural communicative competence? From a case study at a Japanese technological university" The British Association for Applied Linguistics, 48th Conference. Aston

university, UK.

酒井志延(2015)「リメディアル学生を救う指導についての一考察」, 日本リメディアル養育学会, 関西外国語大学。

牧野眞貴(2015)「英語が苦手な大学生に能動的な授業参加を促す指導法---英語を通して英語を学ぼう」, 日本リメディアル教育学会, 北星学園大学。

SAKAI, S. (2016), "Japan US Teachers' Consortium 2016 Perception Gaps of English Language Learning among Japanese University Students," National Association for Developmental Education 2016 conference, Marriott, Anaheim, USA.

SAKAI, S. (2016), "Overview of Japanese Failure in Educational System," National Association for Developmental Education 2016 conference, Marriott, Anaheim, USA.

〔図書〕(計1件)

『Fun Time!---仲間と楽しく英会話』, 総頁数 78. 2016, 朝日出版社。

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井志延 (SAKAI, Shien )  
千葉商科大学 商経学部 教授  
研究者番号：30289780

(2) 研究分担者

牧野真貴 (NAKINO, Masaki )  
近畿大学 法学部 講師  
研究者番号：90581174  
平成 26 年度より研究分担者に

(3) 連携研究者

( )  
研究者番号：